

コピーングや、ていねいな授業で「やればできる」という自信を育てる

東京都立 稔ヶ丘高校

「できない」の裏にある「どうしたら」に込める

稔ヶ丘高校は、不登校経験者や、ほかの学校を退学した生徒などの立ち直りを支援する「チャレンジスクール」として、2007年に開校した。チャレンジスクールのなかでも、制服・頭髪指導を厳しくして、落ちついた環境を好む「まじめでおとなしい生徒」が立ち直るための居場所を志向しているのが特徴だ。

そうした生徒たちのチャレンジを、どう後押しするのか。同校が注意を払ったのは、学校生活での「やってもできない」の積み重なりが、生徒のなかに不安やあきらめを生み、意欲低下を招くという悪循環だった。

ではなぜ「できない」のか。元々やる気がないからではなく、その裏にあるのは「どうしたらいいかわからない」ということではないか。そこで同校は、生徒たちの「どうしたら」に対して具体的なヒントを提示し、できなかつたことを生徒自身に克服させ

ることで、「やったらできた」という達成感や、「やればできる」という自己効力感をもたらそうとした。

そのような意図で創設された独自科目が、1年次の必修科目「コピーング」という授業だ。学習面の問題を克服するための「メソッドタイム」と、人間関係の問題を克服するための「リレーションタイム」で構成される。学習や人間関係がうまくいっていない人が「何となく」やっているのを見える形にし、生徒たちに「意図的に」身につけさせるのだという。

学習に役立つスキルと望ましい学び方を伝える

コピーングの授業は週1回で、受け持つのは1年生のクラス担任だ。メソッドタイムでどんな学習のヒントを提示するのか、いくつか具体例をあげていこう(図1)。

例えば、ノートのスキル。生徒のなかには、先生が黒板に書いたことを、1文字1字確認してはノートに写す者もいる。だから



3年次主任 主幹教諭 山崎茂雄先生



3年次担任 吉田英文先生

School Data

2007年創立 / 総合学科(三部制) / 生徒数744人(男子364人・女子380人) / 進路状況(2011年度実績) 大学・短大32%・専門学校等36%・就職7%・進学準備7%・その他18%

まずは基本として、「1」の語句や文章を把握してからまとめて書き写すと、効率も上がり、板書の意味も理解しながらノートを取れることを伝える。

記憶のスキル。学習心理学の応用として、手順としては、①声に出して読んで憶える、②紙に書いて憶える、③意味を考えながら憶える、④憶えたかどうか、答えを隠して試してみる、⑤できないものを重点的に練習する、というやり方が効果的であることをアドバイスする。

理解のスキル。要約をせずとも箇条書きにできるわかりやすい文章を用意し、生徒に箇条書きに挑戦させる。しだいに文章構造への理解が深まり、いわゆる「文章の要点を押さえる」ことができるようになる。その土台のうえに、教科書を読む力や、黒板を見ながら先生の話聴く力を高め、聴くこと、その要点をまとめた黒板を見る・写すことを、関連づけずにバラバラにしている者が案外多い。

問題解決の方法。どうしたらいいか困

たときに、「問題点をみつける」「解決策をみつける」という2段階に分けて考える、という方法を伝授する。さらにその各段階で、まずは「発散思考」で思いつくままに自由に発想し、その後「収束思考」で考えを絞り込む、という思考の切り替えを意識すると、考えがまとまりやすいことも伝

える。毎週の授業の取り組みについては、「メソッドタイム」という速報プリントで全教員とも共有。各教員は、普段の教科授業でも、コピーングで習ったばかりのスキルを役立てられる場を作ること意識し、生徒が新たに身につけた学び方によって「やっただけだ」と実感できる機会を増やすことに努めている。

図1 コピーング・メソッドタイムの学習内容

タイトル	時数	内容
効果的な学習とは	2	学習観テストで自己診断し、考える
ノートのスキル	2	理解して写す/見やすいノートの書き方
記憶のスキル	3	意味理解の重視、具体的な記憶の方略
集中のスキル	1	授業に集中するためのアイデア
試験勉強の方法	2	学習範囲を分割して計画を立てる
学習動機	3	夢から考える / 学習動機テストで考える
チェックペン学習法	3	自分でスモールステップを作り学習を進める
理解のスキル	4	文章を箇条書きにするトレーニング
問題解決の方法	2	問題把握と解決策 / 発散思考と収束思考
学習の工夫	2	各自の学習の工夫を書き、発表・交流

※■はふだんの学習に役立つスキル、□は理解力を高めるスキル、□は自立した学習者になるためのスキル

学習意欲を高め学力につなげる授業改革

chapter.2 : 学習意欲・学力向上を目指した多彩な授業実践例

タイトル	ノートを書くときのルール
工夫の種類	授業中の工夫・書き方の工夫
科目等	ノートを使用する科目
工夫の内容	<p>私はコーピングメソッドでノートのとり方を学んでから、自分の中でルールをつくりました。</p> <p>1歳 文章を書くときは1行空けてゆとりをもつ。</p> <p>2歳 ノートの隅に先生が話していることをメモする。</p> <p>3歳 カラペンはあらかじめ授業事項専用の色を決める。 (先生がラインをひかなくても自分で大事と見たらわかるようにする) [良かったこと] ノートが見やすくなつて見直しに便利になった。</p> <p>○集中するので先生の話をきちんと聞くようになった。</p> <p>[ルールのポイント] ノートはただ黒板を「写すだけ」ではなく、黒板は「参考程度」。自分で理解できるノートを心がけることが大切だと思います。</p> <p>授業を休んでいる友達のためにノートを書くこともよりやる気がUP♪ あとで友達に見てもらおうと自分がきちんと書いているかチェックできます。</p>

コーピングメソッドの授業の終盤では、それぞれの生徒が自分なりの学習の工夫を用紙にまとめて発表、交流。生徒同士でも「よりよい学習のしかた」への知見を深めていく。

図2 稔ヶ丘高校の学力向上戦略

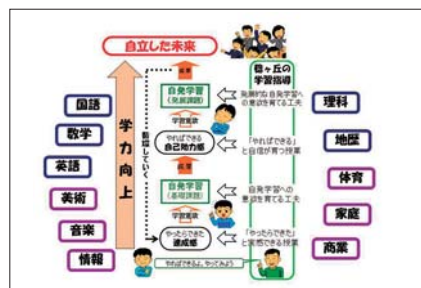
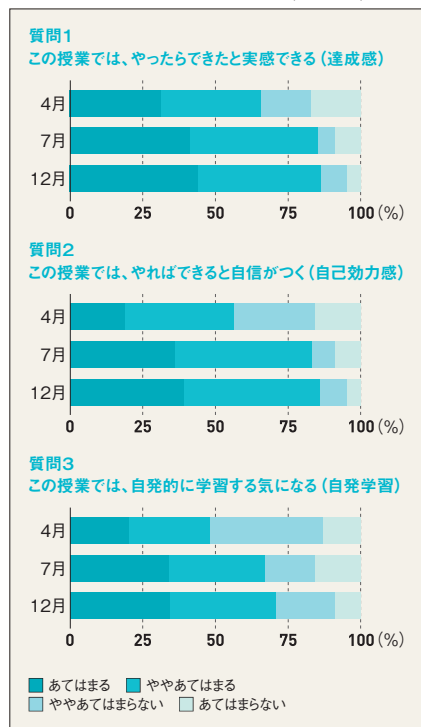


図3 学力観アンケート結果(数学I)



「やったらできた」の実感が自主学習の意欲を引き出す

こうした実践をさらに発展させる形で、稔ヶ丘高校は、校内議論を重ねて、10年に図2のような学力向上戦略をまとめた。①「やったらできた」の小さな達成感を積み重ね、②「やればできる」の自己効力感を育て、③その過程で「自発学習」の意欲を引き出す、という3つを、全教員が意識して全教科で実践するという戦略。いわば「われわれは何を目指して授業を行うのか」という点について、先生たちの共通言語を作りあげたのだ。

この3つを重視すると、授業は次のような循環のなかで進む。「基礎的知識・技能」や「思考力・判断力・表現力などの能力」をただ教え込むのではなく、その学習のなかで生徒に「できた」という達成感をもたらす。生徒の学習意欲が高まるので、受け身でない「主体的な学習」に向かえる

機会をつくり、また、望ましい学び方で学べるようにサポート。生徒の知識・技能や能力の習得が層進み、自信がついて学習意欲がさらに高まる。

学力の3要素である「知識・技能」「能力」「主体的な学習意欲」を相互関係のなかで向上させ、社会に出てからも「自分で工夫して学ぶ」ことができるようにして、生徒の「自立した未来」を育む。それが学力向上戦略の目指すゴールだ。

戦略策定と合わせて、夏休み明けと冬休み明けには、先生同士がお互いの授業の工夫を共有し、応援しあう校内研修会「授業実践交流会」も開始した。

また、戦略の有効性を検討するために、4月、7月、12月の年3回、生徒の変容を調べるアンケートも9教科で実施。図3に挙げたのは数学Iの例だが、どの教科でも、回を追うごとに「達成感」「自己効力感」「自発学習意欲」が相関するように高まるという結果を得られた。

実践のポイント

生徒に答えを押しつけず自主性を引き出す授業です

多くの先生にとって未知の科目「コーピング」をどう展開したのですか？

プログラムの構成を担当しましたが、一元化したワークシートを作成したことが良かったと思っています。1枚めのシートで生徒の問題意識を喚起し、2枚めで対処法を示し、3枚めでそのやり方を実践するという基本構成にし、シートを順番に配り、手元の解説を読み上げれば、授業を進行できるようにしました。そのうえで担当する先生方が、週1回、授業前に打ち合わせをしています(山崎先生)。

取り組んだ先生や生徒の反応は？

生徒が「何となく」身につけてきたことを「意図的に」教える「コーピング」は、先

生方にも初めての経験だと思えますが、自分のクラスの生徒の成長を実感できるので、担任としてのやりがいもあります。学習スキルはできているから「必要ない」と反応する生徒もいますが、年度末のアンケートでメソッドが「役立った」「実際に使っている」と回答した生徒のほうが2年次の成績は向上しています。望ましい学習のしかたが身につくからだと思います(吉田先生)。

学力向上戦略が成果を上げたのはなぜですか？

学習意欲の源泉を、学習活動そのものに求めたのがポイントです。教師が説明して生徒に「わからせる」だけではなく、実際に学習活動をさせて、「できた」感動を味わうことで学習意欲を高め、自ら階段を上っていくようにする。そのためアプローチを工夫するのが授業を作るといふことだと考えています(山崎先生)